

## 四季錄

私はDrill-masunoは37年ほど彫刻作品を作り続けています。この制作活動に向かうきっかけを下さったのは、高校時代に出会った美術の先生でした。私は高校に入学し弓道部に入部しました。当時国語の古文で平家物語の那須与二が出てくるくだり「与一、かぶらを取つてつがひ、よつびいてひやうび放つ」の部分に心酔していましたからです。しかし、学校行事で絵を描く場面で度々時間を忘れ、部活の練習もせずに絵を描くような場面が多くなり、2年生からは美術部に移籍させていただきました。何となく油絵を描いていました。美術のことは何とも分からず、振り返るとただ雰囲気で絵を描いていたのを思い出します。「美術」「油絵」という図式が頭の中にはあります。時代から何となく絵が人より描出します。

けるような気がしていたのでとにかく絵を描いていればそれでいいのだと考えていました。その日も50号のキャンバスにワシの剥製を描こうとしていました。そこに美術の先生が入つてこられ、先生は私に「そげな絵ば描くより、君は石ば彫るほうがよか。ついてきんしゃい（博多弁）」とおっしゃって、私は

私の師匠の話（1）

学校の敷地の隅のほうに連れて行かれました。そこには灰色の100キロほどあろうかと思われる立方体の石が一つ、転がっていたのです。この美術の先生は、私がこの高校に入学するのと同じ時に、同校の通信制課程から全日制課程に移つてこられました。先生は福岡学芸大学（現福岡教育大学）の図工科（後の美

（術科）で彫塑を専門に学ばれ、美術教員となられて教壇に立ちながら塑像作品を継続的に制作しておられたのですが、通信制課程教員の時代に、石屋さんをしている生徒さんから石彫を学ばれたということでした。注意して学校の中を観察すると、通



信制課程の校舎の裏にはこの先生が授業の傍らにこつこつと彫つてこられた石の彫刻作品がたずんでいることに気付きました。

「どうお答えでした。そうか、顔ならどうといつことはあるまい。すぐにできるんじやないか。そんなふうに考えていました。しかし、石を彫るというのは、そんなに簡単なことではありませんでした。太くて大きな「一寸鑿」（せんちゆう）とセットウ（大きな石用の槌）をお示しになれ、先生は「鑿はこげんして（このようにして）、握って、セットウば、カチン、カチンと当てて彫るつたい」とやってみせてくださいましたが、初めは先生のようにリズミカルに打つことはできませんでした。

時折、間違つて手をたたいてしまい、痛い思いをしながらも、私は毎日放課後に学校の敷地の隅で石に向かい続けました。  
(増本 達彦・松山東雲女子大教授・彫刻家△Drillim  
asumoto)